

## 27 日本で最初の精神病専門医高松彝と

## 全漢文のその著書『精神病学綱要』

岡田 靖 雄

加藤伸勝氏より、日本ででた全漢文の精神病学書が京都府立医科大学にあるときき、その写しをいただいた。

その後古書展で遅々久齋『精神病学綱要』の現物を入手した。これは金子準二『日本精神病学書史』にもつていない。島邨俊一が京都療病院の精神病舎でおおきな実績をあげられたのは、高松にたすけられたからと推定できていた(岡田「島邨俊一小伝」、日本医史学雑誌、第三八巻、一九九二年)。この高松の伝記は藤田俊夫氏によりまとめられて、その全生涯をみわたせるようになった(明治の精神科医 高松彝)、医譚、復刊第七二号、一九九七年)。

高松彝は天保七年(一八三六年)八月一日に綾部藩士百木信清の末子に生まれ、高松家の養子となった。嘉永二年(一八四九年)三月から四年あまり江戸の伊東玄朴に、安政一年(一八五四年)三月から何年か適塾にまなんだ。

安政四年綾部にかえって藩主丸鬼氏の侍医となった。京都癲狂院開院の翌一八七六年(明治九年)九月に京都癲狂院勤務を命ぜられた。一八八二年一〇月に京都癲狂院が廃止されると、その設備をひきついで私立京都癲狂院(現在の川越病院につながる)の医員となった。一八八六年二月はその院長となり、一八九四年一月にいたる。その間に高松は、一八八七年六月に有志の寄付をよびかける「精神病室新築趣意」をかき、また同一八八七年(推定)に「合衆国ペンシルバニア州ヒラデルヒア府ペンシルバニア癲狂院長閣下ニ送ル答弁書」をかいている。

京都療病院精神病舎に患者を收容しはじめた一八九八年一月には、高松は療病院二等医になって神経及精神科の医務室につとめ、一九〇五年にいたった(六九歳)。この神経及精神科の比較的開放的な患者処遇は、かれあって可能になったのだろう。一九一四年二月一〇日死去、七七歳。中休み期間があったにしても、三〇年近くを精神病医としてはたらいたのである。

日本にも、七山、鶴森、武田、小松川など癲狂専門の治療所はいくつかあった。京都癲狂院につとめた医師は

ほかにもいたが、そのなかにずっと精神病を専門に医業をつづけた人はほかにいない。専門の教育をドイツでうけた榊 俣が帰国して活動をはじめたのは一八八六年末である。こうみると、高松は西説の精神病学による最初の専門家だったとしてよからう。

遅々久齋とはかれの号で、幼時背がちいさく短気で小奴ちいぢと称されていたことによる。小は遅齋に通じ、また乳くさいの意をこめて遅々久齋と称したという。

『精神病学綱要』は、かれが引退してからの一九一一年(明治四四年)五月一日出版の非売品。菊判で目次とも本文は一九〇ページ。全漢文だが、返り点、送り仮名がついている。一冊だが、上、下にわかれていて、上巻が各論。そこでの疾患分類は、

機能性精神病(鬱憂狂、躁狂、妄覚狂、緊張狂、定期狂及  
回帰狂、偏執狂、遅鈍狂、統養性精神衰弱)

体質機能性神経性精神病(神経衰弱、依剝昆埜兎、喜私的  
里狂、顛癲狂、中毒性精神病)

機質性精神病(急性譫妄、麻痺狂、急性奔躍麻痺、脳徽毒)  
となっている。中毒性精神病には糖尿病がはいっている。

白癡は本文中にでてくる。下巻は総論で、機質編(脳論)、機能性精神病編(精神症状論)、体質性精神病編(身体症状論)、精神病原因編、精神病経過編、薬剤療法編からなる。

疾患分類はクレペリン体系前のもので、比較すると上巻は『吳氏精神病学集要』下巻(二八九五年)によっていることが明白である。薬剤療法編はかれの経験によるようで、かなりくわしい。高松は、精神病医としていきてきたあかしとして、この本をかいたのだろう。

(精神科医療史研究会・東京)